

宮城県における看護職の大学院進学ニーズ調査報告

－病院看護職への調査－

塩野悦子¹⁾、山田紀代美¹⁾、真覚健¹⁾、中塚晴夫¹⁾、菊地登喜子¹⁾

キーワード：進学ニーズ 看護系大学院 病院看護職 宮城県

要 旨

宮城県における病院看護職の大学院への進学ニーズを把握するために、宮城県内の病院に勤務する看護職1496名を対象に調査を行なった（回収率88.3%）。病院看護職における大学院への進学希望者は22.7%（340名）だった。「すぐにでも進学したい」者は15人（1.0%）で、「条件が整えば進学したい」者は325人（21.7%）であった。大学院で希望する専門領域は、「がん看護」、「成人看護」、「在宅看護」が多かった。大学院進学に有意に関連する要因は、年代、配偶者の有無、学歴、大学院看護研究科の周知度であった。今後、病院看護職の大学院進学ニーズを高めるために、大学院に関する情報提供および大学院の周知度を高めることが必要である。

The Need for Graduate Nursing Schools in Miyagi Prefecture

－Hospital Nurses－

Etsuko Shiono¹⁾, Kiyomi Yamada¹⁾, Ken Masame¹⁾, Haruo Nakatsuka¹⁾, Tokiko Kikuchi¹⁾

Key words : need for advanced study, nursing graduate school, hospital nurses, Miyagi prefecture

Abstract

The purpose of this study was to develop an understanding of the needs of hospital nurses in Miyagi prefecture in relation to further study at a graduate-level nursing school. Responses were obtained from 1496 hospital nurses (response rate 88.3%). The results were as follows. Of the hospital nurses who responded, 340 (22.7%) felt a need for advanced study at a graduate school: 15 (1.0%) wanted to enroll immediately, but 325 (21.7%) indicated that there were conditions which would determine their enrollment. Many of these nurses wanted to specialize in "cancer nursing," "adult nursing," or "in-home nursing". The factors related to the perceived need for graduate school were age, marital status, education, and the extent of knowledge about the Graduate School of Nursing at Miyagi University. This indicates a need for increased publicity for Miyagi University in order to enhance the desire for advanced study among hospital nurses..

1) 宮城大学看護学部

Miyagi University, School of Nursing

1. はじめに

医療の高度化・医療体制の複雑化に伴う看護の質の向上のために、看護教育システムとして学士課程の大幅な増加とともに、大学院教育の充実化が図られている。大学院修士課程では、研究基礎能力と高度の専門性をもった臨床専門家の育成を行い、看護の発展に寄与する人材を育成することが期待されている。当大学では平成13年度より大学院修士課程（看護学研究科）が併設された。その中でも社会人入学の大学院生がほとんどを占めており、さらに社会人の勤務体制や学習動機などに柔軟に対応したカリキュラムづくりを行い、少しでも開かれた大学院として教育体制を整える必要性があると考えた。そこで、宮城県内の看護職の大学院への進学のニーズを明らかにすることを目的に本調査を実施した。

対象者の看護職は、①病院看護職（病院に常勤する看護師および助産師）、②行政保健師（保健所等に常勤する保健師）、③管理者（病院看護職と行政保健師の管理者）の3つに分類し、本研究では、病院看護職の調査を報告する。

2. 調査目的

宮城県内の病院に勤務する看護職の大学院への進学ニーズを把握し、今後の看護系大学院の運営・教育の検討資料とする。

3. 研究方法

1) 対象

宮城県内の300床以上の6病院に勤務する看護職とする。

2) 調査期間

平成16年3月8日～19日

3) 調査方法

病院看護部に、病棟ごとに区分けした所属看護職数分の自記式調査票を一括郵送あるいは配布した。病院看護部は各病棟責任者を通して各看護職に記入を依頼した。記入の終わった調査票を個別の封筒に厳封し、病棟責任者を通じて病院看護部が調査票を回収し、一括返送を行なった。

4) 調査内容

調査項目は、平井等¹⁾が実施した愛知県における看護職の大学院進学ニーズ調査を参考に作成した。概要は以下のとおりである。

①年齢、②性別、③配偶者の有無、④職種、⑤勤務年数、⑥最終学歴、⑦進学希望状況、⑧進学動機、⑨希望領域、⑩進学における重視項目、⑪進学に関する支援体制への要望（勤務先側・大学側）、⑫当大学看護学研究科の周知度、⑬宮城大学大学院に希望すること（自由記載）。

5) 分析方法

大学院進学に関連する要因の検討においては、「すぐにも進学したい」と「条件が整えば進学したい」を進学希望群（340人）として、「考えていない」と「その他」を進学希望なし群（1137人）として分析を行った。統計的な有意差検定では、 χ^2 検定ないしt検定を用いた。統計ソフトはSPSS12.0 J for Windowsを使用した。自由記載は内容ごとに分類をして分析を行った。

6) 倫理的配慮

調査依頼文にて調査目的を説明したこと、調査は匿名性であること、調査結果は目的以外には使用しないこと、回答施設が特定されないような統計処理を行なうことにおいて倫理的な配慮を行なった。

4. 結果

1695名に配布した。回収率は88.3%で、有効回答数は1496名であった。

1) 対象者の背景

(1) 年齢・性別・配偶者の有無

対象者の年齢は、20代が731人（48.9%）、30代が369人（24.7%）、40代が263人（17.6%）、50代以上が124人（8.3%）、無回答9人（0.6%）で、平均年齢は33.1±9.6歳であった。性別は女性が98.1%で、未婚者が60.2%であった。

(2) 職種・勤務年数・最終学歴

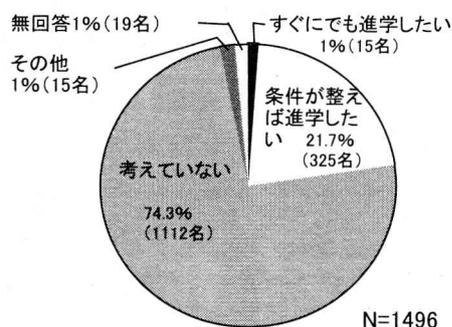
職種は、看護師が1318人（88.1%）、助産師が97人（6.5%）、准看護師が69人（4.6%）、保健師が2人（0.1%）・無回答が10人（0.7%）であった。勤務年数は1年未満が211人（14.1

%)、1～2年が604人(40.4%)、3～4年が259人(17.3%)、5年以上が221人(14.8%)、無回答が201人(13.4%)であった。最終学歴は専門学校が1177人(78.7%)、短期大学が113人(7.6%)、大学が68人(4.5%)、准看護学校が64人(4.3%)、高等学校が41人(2.7%)、大学院修士課程修了者が3人(0.2%)、無回答が30人(2.0%)であった。

2) 大学院への進学希望状況

大学院へ「すぐにでも進学したい」者は15人(1%)、「条件を整えば進学したい」者は325人(21.7%)、「考えていない」者が1112人(74.3%)であった。「すぐにでも」と「条件を整えば」を合わせると、進学希望者は340人(22.7%)であった(図1)。

図1. 大学院への進学の希望状況



また、「条件を整えば進学する」と答えた者(325人)に、その条件について問うと、「経済面」が237人(72.9%)、「近くに行きたい大学院がない」が56人(17.2%)、「子育てに時間がかかる」が55人(16.9%)、「家族の同意がえられない」が32人(9.8%)、「CNSをとりたいが、近くに取りれる大学院がない」が30人(9.2%)、その他57人(17.5%)であった(表1)。

また、進学を「考えていない」と答えた理由は、「今の状況で十分」が375人(33.7%)、「経

表1. 進学にいたる条件

項目	(複数回答) n=325	
	人数(人)	%
経済面	237	72.9
近くに行きたい大学院がない	56	17.2
子育てに時間がかかる	55	16.9
家族の同意が得られない	32	9.8
CNSの取得できる大学院がない	30	9.2
その他	57	17.5

表2. 進学を考えない理由

(複数回答) n=1112

項目	人数(人)	%
今の状況で十分	375	33.7
経済面	362	32.6
必要性を感じない	336	30.2
検討がつかない	176	15.8
大学院を知らなかった	52	4.7
その他	244	21.9

済面」が362人(32.6%)、「必要性を感じない」が336人(30.2%)、「検討がつかない」が176人(15.8%)、「大学院を知らなかった」が52人(4.7%)、その他が244人(21.9%)であった(表2)。

3) 進学希望者への調査(進学動機・希望領域・進学において重視すること)

大学院への進学を希望した340名のみ質問項目を設定した。

大学院への進学動機(単数回答)は、「専門的学問の習得」が157人(46.2%)、「自己研鑽」が78人(22.9%)、「学位の取得」が25人(7.4%)、「CNSの取得」が15人(4.4%)、「研究方法の習得」が13人(3.8%)であった。その他に「取りくむべき研究課題がある」、「教育職になりたい」、「管理者になりたい」があった(表3)。

表3. 大学院進学の動機

(単数回答) n=340

項目	人数(人)	%
専門的学問の習得	157	46.2
自己研鑽	78	22.9
学位の取得	25	7.4
CNSの取得	15	4.4
研究方法の習得	13	3.8
研究課題あり	5	1.4
教育職になりたい	4	1.2
管理者になりたい	2	0.6
その他	3	0.9
無回答	38	11.2

大学院で希望する専門領域は、がん看護が66人(19.4%)、成人看護が39人(11.5%)、在宅看護が31人(9.1%)、地域看護が29人(8.5%)、母性看護が23人(6.8%)、老年看護が19人(5.6%)、小児看護が16人(4.7%)、精神看護が15人(4.4%)、国際看護が14人(4.1%)、その他50人(14.7%)であった(図2)。

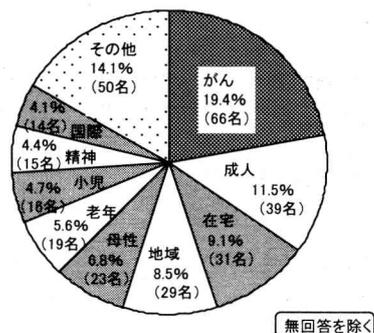


図2. 修士課程で希望する看護専門領域 n=340

大学院進学において重視する要素（上位2項目を選択）としては、「希望する専門領域がある」が205人（60.3%）、「カリキュラムに学びたい科目がある」が164人（48.2%）、「経済面」が107人（31.5%）、「通いやすさ」が60人（17.6%）、「入試科目に英語がない」が51人（15.0%）、「指導を受けたい教員がいる」が11人（3.2%）、「卒業大学だから」が4人（1.2%）であった（表4）。

表4. 進学にあたって重視する点

項目	人数(人)	%
希望する専門領域がある	205	60.3
カリキュラムに学びたい科目があ	164	48.2
経済面	107	31.5
通いやすさ	60	17.6
入試科目に英語がない	51	15
指導を受けたい教員がいる	11	3.2
卒業大学だから	4	1.2
その他	6	1.8

4) 進学希望者の希望する支援内容

（職場側へ・大学側へ）

大学院進学に際しての支援体制として、職場側（病院）に要望していることは、「給与保証」が212人（62.4%）、「休職保証」が208人（61.2%）、「勤務時間の考慮」が172人（50.6%）、「長期派遣制度」が126人（37.1%）、「勤務内容の考慮」が77人（22.6%）、「所属部署の変更」が22人（6.5%）であった。

大学院進学に際しての支援体制として、進学先の大学院に要望していることは、「時間割の柔軟性」が206人（60.6%）、「夜間開講」が158人（46.5%）、「奨学金保証」が134人（39.4%）、「土日開講」が121人（35.6%）、「サテライト教

表5. 希望する支援内容

項目	(複数回答) n=340	
	人数(人)	%
<職場側>		
給与保証	212	62.4
休職保証	208	61.2
勤務時間	172	50.6
派遣制度	126	37.1
勤務内容	77	22.6
部署変更	22	6.5
<大学院側>		
時間割の柔軟性	206	60.6
夜間開講	158	46.5
奨学金	134	39.4
土日開講	121	35.6
サテライト教室	110	32.4

室」が110人（32.4%）であった（表5）。

5) 宮城大学大学院看護学研究所の周知度

当大学院については、「知っていた」が468人（31.3%）、「聞いたことはある」が411人（27.5%）、「全く知らなかった」が605人（40.4%）であった（図3）。また、専門学校卒業生の入学が可能であることについては、「知っていた」が353人（23.6%）、「聞いたことはある」が317人（21.2%）、「全く知らなかった」が810人（54.1%）であった。当大学院入試における社会人枠の存在については、「知っていた」が103人（26.1%）、「聞いたことはある」が97人（24.6%）、「全く知らなかった」が192人（48.6%）であった。

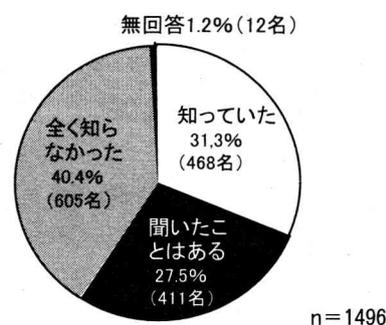


図3. 宮城大学大学院看護学研究所についての周知度

6) 当大学院看護学研究所への要望・意見（自由記載）

当大学に関する意見・要望等の自由記載から以下の内容を分類した。

「専門学校卒業生の入学が可能と知り、前向きに考えたい」、「大学卒業でなくても進学できることを知り、進学も考えてみたい」など、大学院入学資格があることを知ったことから、進学への意識の変化が見られていた。また、「大学院のPRが足りない」、「知らないことが多いのでもっと情報をアピールしてほしい」など、大学院情報開示への要望があった。「大学院のみではなく、もっと市民向け講座や研修会・講演会などを開いて学習する機会を作ってほしい」など、大学院というより宮城大学の地域貢献に対する要望があった。「再就職に不安がある」、「子どもが小さくても進学できるように保育所を設置してほしい」など、進学がむずかしい現状が記載されていた。さらに「CNSコースの検討はぜひ実現していただきたい」、「CNSコースの専門領域を増やしてほしい」など、CNSコースへの要望があった。その他として、「看護職の社会的地位向上のためにリードしてほしい」などの大学および大学院の看護への貢献の期待、入試における英語科目のあり方、今回の調査報告の要望などが記載されていた。

7) 大学院進学に関連する要因

大学院の進学希望と有意に関連が認められたのは、年代、配偶者の有無、学歴、看護研究科の周知度、平均年齢、平均勤続年数であった(表6)。

表6. 進学希望に関連する要因

		n=1477 ^{注)}		
項目		進学希望群 340(人)	進学希望なし群 1137(人)	検定
年代	20歳代	180	544	** (χ ² 検定)
	30歳代	95	272	
	40歳代	52	207	
	50歳代以上	13	106	
配偶者の有無	有り	116	468	* (χ ² 検定)
	無し	224	660	
学歴	高等学校・準看	16	80	*** (χ ² 検定)
	専門学校	252	919	
	短大	31	82	
	大学	31	38	
看護研究科の周知度	知っている	132	330	*** (χ ² 検定)
	聞いたことがある	112	295	
	全く知らない	92	505	
平均年齢		31.40±8.18歳	33.53±9.89歳	*** (t検定)
平均勤続年数		9.59±7.73年	11.59±9.70年	*** (t検定)

注)欠損値省略のため、各項目の総和はnと一致しない場合がある *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

4. 考 察

1) 大学院への進学希望者について

宮城県における病院看護職の大学院への進学ニーズは、「すぐにでも進学したい」と「条件が整えば進学したい」を合わせて22.7%という結果であり、愛知県における調査²⁾の26%に比べてやや低い傾向にあった。しかし、愛知県の調査には教員も含まれていることを加味するとほぼ同じ割合とも考えられる。

進学希望群の中では「条件が整えば進学したい」と答えた者がほとんどを占めているが、その条件として、経済面が主であり、進学にあたっての費用のみならず、仕事を辞めて進学する経済的問題も含まれているものとする。また、対象の約7割が20歳代から30歳代であり、子育てとの両立も進学を阻む大きな要素となっている。また「CNSを取得できる大学院がない」という条件をあげたのは少数だが、同時に行なった保健師の調査結果よりは多く、自由記載にもCNSコースの要望があることから、病院看護職としてCNSコースへのニーズを十分に考慮していく必要がある。

「進学を考えていない」のは74.3%と多数を占め、その半数近くが「必要性を感じない」であった。臨床では看護の質の向上のために、各々が院内研究や他組織の研修に参加するなどしているが、その選択肢の1つとして大学院はなかなか現状から厳しいのかもしれない。しかし、当大学看護学研究科の存在や受験資格などについての情報が浸透していなかった結果から、大学側は、大学院の情報および大学院における学びの意義についての情報開示により一層の努力を行い、多くの看護者に認知の機会を提供していかなければならない。

大学院への進学希望者の進学動機については、「専門的学問の習得」と「自己研鑽」が約70%を占め、多くの病院看護職が自分の専門性を高め、向上させたいために大学院へ進学することを望んでいると解釈できる。また進学する際に重視する要素としては、「希望する専門領域がある」、「カリキュラムに希望する科目がある」が上位にあることから、自分の専門性を向上さ

せていきたいと意欲をもつ病院看護職の存在を十分に把握していかなければならない。その他として「経済面」や「通いやすさ」などもあげられ、働きながらあるいは子育ての両立を図りながら進学するためには、さまざまな条件が成り立っていることが必要であることが再認識された。

大学院で希望する専門領域については、「がん看護」「成人看護」が多く、病院看護職の大多数が内科や外科の成人看護系統の現場に勤務するためと考えられる。「がん看護」の要望が多いのは、最近のがん医療の進展および複雑さに伴うがん看護の専門家の必要性を示している。また、病院看護職ではあるものの医療体制の変化から「在宅看護」や「地域看護」分野の専門性を高める必要性に迫られていることも推察できる。

また、大学院進学希望の有無は、年代・配偶者の有無と有意に関連があることから、病院看護職は、比較的年代が若く、未婚者が進学する傾向にあると考えられる。学歴も進学要因として有意差があることから、大学卒業者は大学院進学を念頭においている可能性が高いことが考えられる。看護研究科の周知度も進学希望要因と関連があったことから、今後は大学院の情報を十分に提供して、潜在的に大学院を目指している看護職のニーズに応えていく必要がある。

2) 支援体制への要望

社会人として大学院へ進学するためには、さまざまな条件が整っている必要があるが、個人の意欲のみならず、無理のない支援体制が必須条件となる。勤務先には、「給与や休職の保証」や「勤務時間の考慮」、大学側には、「時間割の柔軟性」、「夜間開講」、「土日開講」、「サテライト教室」などを期待していたように、個人の社会的立場の保証、現在の職務への最小限の影響そして柔軟な運営体制が重要な要素となる。支援体制が整っていれば、一人でも多くの看護職が進学し、専門性を向上させ、看護の質に貢献することができるため、勤務先および大学側の両者は、できるかぎりその機会を提供することが期待されている。

5. 結論

- 1) 病院看護職における大学院への進学希望者は22.7% (340名) で、「すぐにも進学したい」者は15人 (1.0%) で、「条件が整えば進学したい」者は325人 (21.7%) であった。
- 2) 大学院で希望する専門領域は、「がん看護」「成人看護」「在宅看護」が多かった。
- 3) 大学院進学に有意に関連する要因は、年代、配偶者の有無、学歴、大学院看護研究科の周知度であった。

6. おわりに

宮城県の病院看護職の大学院進学を本格的に考えている者は極わずかであった。さまざまな条件や支援体制が整っていないことも一因であるが、大学院の情報が十分にいきわたっていないことも大きい。高瀬ら³⁾によると、大学院への学習動機は高まっても、修士を得ることの社会的価値がはっきりしていないため、学位に対する評価の期待と、学位にみあう実践能力の不安が存在することを述べている。また、看護系大学院の修了生の就業先は教育が多い⁴⁾ことから、臨床現場との距離が大きくなる可能性も考えられる。看護系大学院で学ぶことの社会的価値が十分に周知されることが今後の課題であると考えられる。

最後にこの調査にご協力いただきました宮城県の病院看護職の皆さまに深謝申し上げます。また、統計処理に参加していただいた宮城大学看護学部4年生の千葉みゆきさん、3年生の内海優子さん、2年生の狩野いくみさん、伊藤宏さん、佐藤文枝さんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 平井さよ子、海老真由美、山田聡子、箕浦哲嗣、村山正子、草刈淳子：看護職の大学院への進学ニーズに関する調査。愛知県立看護大学紀要、8、33-40、2002。
- 2) 前掲書1)、p34
- 3) 高瀬佳苗、横尾初美、坂本成美、坂口千鶴、河口てる子：看護大学院生の学習動機、Quality Nursing、5(12)、31-36、1999

- 4) 小澤道子、及川郁子、横山美樹、伊藤和弘、
白木和夫、堀内成子、射場典子、有森直子、鈴
木里利：大学院修了生の動向－聖路加看護大学
大学院1980～2000－、聖路加看護大学紀要、29、
47－58、2003